COVID-19

コロナ禍における入試実施

令和3年度大学入学者選抜は、大学入学共通テスト実施初年度として、入試制度改革が進行する中で注目されてきた。しかし、コロナ禍という思いがけない事態が重なり、実施主体である大学、受験生、関係者にとって、予想だにしない状況下での入試実施となった。

コロナ禍とはいかなるものか――手探りの中で迎えた令和2年度大学入学者選抜と異なり、令和2年10月29日に決定・改訂された「令和3年度大学入学者選抜に係る新型コロナウイルス感染症に対応した

CONTENTS

第3ピリオドを目前にして
―近畿大学入学試験での感染症対策のこれまで―
古久保 潤一
近畿大学
大学運営本部入学センター次長

「実践知」を体現したコロナ禍の入試
金子 大輔
法政大学入学センター入試課長

Exams VS C

試験実施のガイドライン」においては、感染予防対策や、受験生に対する要請事項が示された。

大学においては、感染予防対策の一環として、マスク着用の義務化、試験会場収容定員数の削減、試験終了後の時差退構や、受験生が罹患あるいは濃厚接触者となった場合等を想定したさまざまな措置を講ずるなど、これまでの入試実施とは状況が一変することとなった。オンライン面接の導入もその変化の一つであろう。コロナ禍が収束する段階を迎えたとしても、この変化で得られた気づきは、大学にとって今後も重要なテーマとなるのではないだろうか。

『大学時報』ではこれまで、第396号小特集「コロナ禍における入試広報」において、コロナ禍の影響を受けた令和2年春から夏の入試広報の取り組みを総括してきた。本企画では、入学試験実施段階にスポットを当て、各大学での状況や取り組みを明らかにし、令和3年度大学入学者選抜の「記録」として、広く大学間で情報を共有することを狙いとする。

コロナ禍における入学試験の実施について

森脇 裕美子
松山大学入学広報部次長

コロナ禍での大学入試準備、実施を振り返る

飯山 晴信
学校法人武蔵野大学経営企画部長

オンラインを活用した入試の実施と可能性
—総合型選抜、学校推薦型選抜での活用事例を通して—

井上 隆信
大正大学入試部部長

コロナ禍における入学者選抜の実施
—東北学院大学の対応—

七海 雅人
東北学院大学入試部
大学アドミッションオフィサー

第3ピリオドを目前にして
―近畿大学入学試験での感染症対策のこれまで―

古久保 潤一
近畿大学
大学運営本部入学センター次長

1 第1ピリオド（令和2年度）

新型コロナウイルス感染症への対応は、令和2年2月の一般入学試験前期B日程からである。「マスクや消毒液は大丈夫か?」が開幕ベルであった。

10年前の新型インフルエンザ対策の記録が唯一のテキスト。大いに活用する。従来、受験生が試験時間中にマスク着用をする場合、あらかじめ配慮申請を必要としていたが、事前申請なくともマスク着用可。本人確認のための写真照合時にはマスクを外させる。また、罹患した受験生への配慮として、3月に実施する後期日程に振り替える告知を行う。

暖かくなったら感染は落ち着くのではないか、淡い期待に反して、後期日程では、より深刻な事態に直面する。新たな感染症対策として、受験生だけではなく、試験監督者および監督補助員にもマスク着用を義務とした。不正行為を未然に防ぐために受験生の座席間隔を空けているので、密回避はすでにできている。加えて、試験時間中30分間に1回程度の換気を全試験室で行う。各試験室では、換気中の外部からの音に対して必要以上に警戒する。幸いにも試験を中断することはなかった。

令和2年度完遂。休校措置が全国で広まる中、すぐさま新年度入学試験対応の再検討に取りかかる。

2 第2ピリオド（令和3年度）

大学入学者選抜実施要項と新型コロナウイルス感染症に対応した試験実施のガイドラインで、感染症対策が示されたことに正直安堵した。試行錯誤ながらも、すでに行ってきたこととほぼ同じであったからである。

感染した試験監督者や監督補助員が受験生への感染源となることは、最も避けるべき。試験監督者および監督補助員には、試験当日の1週間前から記録する健康セルフチェックシート項目に抵触した場合は欠席させる。別の教

S COVID-19

職員が代わりに監督業務に就く。人員は大丈夫だろうか。当日の代替え要員を大量に確保するため、試験監督の業務委託を拡大する。緊急事態出動への対応は、全キャンパス、全教職員が行う。急きょ別室受験対応で、失礼ながらも副学長および学部長に試験監督をお願いした。もはや聖域なし。また、試験監督者および監督補助員には、サージカルマスク着用とともにフェイスシールド着用も義務とした。万が一のために防護服も準備する。

地方試験会場の追加確保が難航した。受験生心理として感染防止のためできるだけ移動したくない、地元で受験できるのであれば受験したい。志願者数が試験定員を超えたために急きょ別会場を設けた地方会場もあった。ある地方会場では、他県イベントには貸出できなくなったとの一報が入る。すでに入学試験要項に会場として記載済みであったが、出願期間前までに別会場を確保、受験生に周知徹底しなければならない。全日程において、受験生が試験会場を迷うことなく、いつも通りの試験を実施できたことは僥倖（ぎょうこう）である。

試験当日に体調不良者への対応として、東大阪会場では医師と看護師で対処している。地方試験会場にもオンラインで体調不良者への対応をできないかとの提案あり。背景として、東大阪キャンパス内には、診療を行うクリニックがあり、大学入学共通テストを含めて全試験日程で医師と看護師が待機している。さらに、オンライン授業でも使用しているシステムを活用すれば、地方試験会場での対応も可能ではないか。既存システムの転用であり、すぐさま導入決定。

本学独自試験の終了直後は、まともに歩けないほど過密となる。一斉に退出しないようにブロック退場を試みる。受験生が最も多い前期A日程でできるだけ短時間に効率よく退出誘導を行うために、比較的小規模の一般公募推薦入学試験計4日間での結果をもとに改良を図る。受験生には事前に周知していたこともあり、大きなトラブルもなく成功裏に終わる。

令和3年度終了。満身創痍を実感する。

3 第3ピリオドに向けて

受験生が安心して試験で十分に力を発揮できるように努めることは当然である。その意識が担当部署だけではなく、全教職員が共有していたからこそ乗り切ることができたと確信している。令和4年度も、いつも通りの入学試験を実施できるように粛々と進めていく。

Exams V

「実践知」を体現したコロナ禍の入試

金子 大輔
法政大学入学センター入試課長

はじめに

筆者は昨年（2020年）6月に現職の入学センター入試課長の職に就いた。それまでは総務部庶務課長として新型コロナウイルス感染症における危機管理全般に関わる傍ら、中止に追い込まれた卒入学式の対応に当たっていた。このころ毎週のように開催され、筆者も出席していた危機対策本部会議では、入学試験についても話題になった。数万人規模を受け入れる入試の実施なんて考えられない、といった意見も出ていた。そのような中で入学センターに異動を命じられ、異動直後から大きな課題を突きつけられることとなった。本稿では、2月5日から16日の中の全8日程で実施される一般入試に的を絞って、本学の取り組みをご紹介したい。

1 本学の一般入試について

本学のコロナ禍における一般入試の実施についてお伝えする前に、本学の一般選抜の概要についてお伝えしたい。

本学の一般選抜は、①T日程入試（統一日程）、②英語外部試験利用入試、③A方式入試（個別日程）、④大学入学共通テスト利用入試B方式〈3教科型〉、⑤大学入学共通テスト利用入試C方式〈5教科6科目型〉があり［図表1］、このうち、本学では①～③を一般入試と称している。④と⑤は大学入学共通テストの得点を合否判定に使用し、個別学力試験は課さない。①と②の試験日は2

一般選抜	一般入試	①T日程入試（統一日程） ②英語外部試験利用入試 ③A方式入試（個別日程）
	大学入学共通テスト利用入試	④B方式＜3教科型＞ ⑤C方式＜5教科6科目型＞

［図表1］法政大学の一般選抜

月5日で併願が可能で、全国10都市に会場を設けている。2021年度は約1万2千名が出願した。③は2月7日から16日の間の7日程で行われ、募集人数が最も多い方式であり、全国6都市に会場を設けている。2021年度は全7日程で合計約4万7千5百名が出願した。

本学の一般入試は、筆者が所属する入学センターが中心となって実施するが、各部局に役割が当てられており、全学体制で実施する［図表2］。試験監督は専任教員と専任職員それぞれに担当回数を割り当てており、非専任職員にも可能な範囲で協力をお願いしている。教職員で賄えない分については、主に体育会の学生を臨時職員として雇用して補っている。体育会の学生には試験監督のほか、進行本部内における問題解答用紙の振り分けや答案等の回収、受験生の誘導業務等もお願いしている。地域会場については、本部要員を専任職員が担当し、試験監督はアウトソーシングしている。

役割	担当部局等
進行本部	学務部、多摩事務部、小金井事務部、地域入試チーム
採点室	学務部
監督者の割付	人事部
試験会場の施設管理	施設部
配慮を希望する受験生対応	障がい学生支援室
学生補助員の手配	学生センター
検問	総務部
診療所	保健体育センター

［図表2］一般入試における各部局の役割

2 緊急事態宣言下の「入試委員会」における決定事項

5月下旬、入学試験に関する重要事項を審議する「入試委員会」において、一般入試については以下3点を決定した。

(1)「3密」を避けた実施を心がけ、広い会場の確保と監督者の確保など実施体制の強化を行う。会場確保については、近隣の大学や外部会場の利用拡大を検討し、現在使用していない多摩キャンパスや付属校の利用可能性も検討する。

(2)一般入試予備日として3月6日を設定しているが、必要に応じて予備日の追加を検討する。

(3)1月16日・17日に行われる大学入学共通テストに関しても、大学入試センターの指示に則り、安全な実施に取り組む。

前述のほか、一般入試の実施が困難になる可能性も考慮し、総合型選抜、学校推薦型選抜も活用して入学者を確保することを確認した。

3 ガイドラインの一覧化と共有

6月19日、『令和3年度大学入学者選抜実施要項』の通知と併せて、『令和3年度大学入学者選抜に係る新型コロナウイルス感染症に対応した試験実施のガイドライン』(以下、ガイドライン)が文部科学省より通知された。その中で入試の実施については、感染拡大の防止策をあらかじめ講じておけば、リスクは比較的低位に分類される、とされた。5月下旬の時点では入学試験が実施できるのか懐疑的であったが、ガイドラインにこのように示されたことにより、入学試験は万全な対策を講じれば実施できるものと考えることができるようになった。そこで、私はこのガイドラインを一覧化し、項目一つ一つについて、本学ではどのように対応すべきか、また学内のどの部局が対応にあたるのかを考えた[図表3]。この対比表は、後々、学内の各会議体の資料として使用され、議論や情報共有に役立つこととなった。各会議体でのブラッシュアップを経た完成版は、試験監督者が参照する『法政大学2021年度入学試験監督要領』(以下、監督要領)に掲載することで、入試期間中いつでも参照できるようにした。

4 試験会場の確保

ガイドラインでは、「可能な限り受験生の人数を通常の講義、会議等での使用時における収容定員の半分程度以内とすることが望ましいこと。(中略)受験生の人数が通常使用時の収容定員の半分程度を超える試験室がある場合は、当初予定していた試験室数の増設を検討すること。」とされた。本学の入試では、もともと通常の講義等での使用時における収容定員の60%程度で受験生を収容していたが、さらに1割分の定員削減が必要となった。この「収容定員の半分程度以内」という基準を用いて試算した結果、全8日程のうち、2月5日と7日について例年用意している会場では収容できない見込となった。(ガイドラインは10月29日付で改定された。「当初予定していた試験室数の増設を検討すること。」は削除され、「本ガイドラインで示すその他のさまざまな感染対策を講じていれば、試験室の確保について追加的な対応は不要」となった。しかし、受験生の不安を解消する点において、「収容定員の半分程度以内」としたことは奏功したと考える。)

増設会場としては、学内では入試で使用していないキャン

Exams VS C

「令和3年度大学入学者選抜に係る新型コロナウイルス感染症に対応した試験実施のガイドライン」（文部科学省）
への本学の対応一覧

2021年度　第3回　入試実行委員会　資料37
入学センター 2021.1.20

No.	要請事項1	要請事項2	本学の対応内容	対応部局等
1	試験室の確保	通常の使用時における収容定員の半分程度以内とすることが望ましいが，その他の様々な感染対策を講じていれば，追加的な対応は不要であること。	各教室の最大収容人数の半分程度以内で設定している。	入学センター，各進行本部
2	受験生のマスク着用	マスクの着用を義務付け，未所持者には提供を行うこと。 試験場内ではマスクを廃棄しないこと。	検問で未着用を発見次第，マスクを付与できる体制を整える。また，毎時限開始前にも確認と付与が可能な体制を整える。 マスクを廃棄しないことについては入試要項に記載している。監督要領にセリフを記載。【試験時間中は常にマスクを着用してください。なお，写真票と受験者の顔の確認を行う際には，一時 的にマスクを外すよう指示することがあります。】【マスクを常に着用して，試験場内では廃棄しないでください。それでは，これから休憩時間とします。】	庶務課，学務部，小金井事務部，各進行本部，入学センター
3	手指消毒剤準備	試験室への入退出ごとに手指消毒を義務付けること。監督者等も同様であること。	検問，各教室，進行本部その他の場所に適宜設置する。 入試要項に記載している。監督要領に記載。	入学センター，学務部，庶務課，小金井事務部，各進行本部等
4	監督者の健康観察等	試験前7日程度を目安に検温などに体温測定を行うこと。 昼食時を除きマスクの着用を義務付けること。	監督者入構証，監督要領に記載。 「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に関する健康状態記録表（教職員用）」使用を推奨。	人事部，学務部，保健課
5	医師・看護師の配置	医師・看護師等の配置に努めること。	保健課（市ヶ谷診療所，小金井診療所，市ヶ谷田町，二中高） 委託（TKP市ヶ谷，中大後楽園，各地域会場） ＊医師は市ヶ谷・小金井診療所のみ	保健課，入学センター
6	別室の確保	発熱・咳，無症状の濃厚接触者のための別室を設けること。（2メートル以上の間隔確保。医師，看護師の待機場所から近いことが望ましい。基礎疾患のある者や合理的配慮を要する者とは別に確保。）	①合理的配慮を要する障害等のある者（基礎疾患を有する者を含む） ②発熱・咳等の症状のある者 ③無症状の濃厚接触者 ④マスクの着用ができない特段の理由がある者 ＊①と④は同じでよいが，配慮の内容によっては適宜分ける。 ＊②と③は分けるのが望ましいが同じでも可 ＊①と④は（②＋③）と分ける。	各進行本部
7	机・椅子の消毒	試験日前に消毒用アルコールを使用した拭き取りを行うこと。 試験日前72時間以内に試験場となる施設の関係者の感染が判明した場合には，保健所等と連携して，当該感染者が活動した範囲を特定して汚染が想定される物品を消毒すること（消毒できていない箇所は立ち入り禁止とするなどの処置も考えられる）。	業務委託で実施する。	環境保全課，小金井事務，入学センター
8	入場時の混雑回避	入場開始時間を早めるなど，混雑を避けるための工夫を行うこと。	市ヶ谷キャンパス正門の検問は8:30に開門時刻を早める。他の会場は実情に応じて，各会場の検問担当や進行本部等が判断する。	庶務課，小金井事務部，各進行本部等
9	トイレの混雑回避	入口に動線を示す（例えばマーキング等）とともに，混雑を避けた利用，手洗いなどを促す掲示をすること。実情に応じ休憩時間を長めに確保すること。トイレ内の換気に注意を払うこと。発熱・咳，無症状の濃厚接触者の別室受験を認める場合は可能な限りトイレを別に確保することが望ましい。	補助員・誘導員による誘導と可能な範囲でマーキングを実施 監督要領にセリフを記載（毎時限終了時）	環境保全課，学生センター，学務部，各進行本部等
10	退場時の混雑回避	一斉退出は認めず，教室ごと，列ごと等の退出の順番を決めておく，一定間隔を空けて退場させる，複数の出口を使用するなどの工夫を行うこと。	各会場の実情に応じて時差退構の実施を検討する。 複数の出口がある場合には利用を検討する。監督要領のセリフを入れる。【退室する際は，混雑を避けるため，他の人と一定間隔を空けるようにしてください。】	庶務課，小金井事務部，各進行本部等
11	保護者控室	受験以外の用務がある者の入場は最小限とし，保護者控室は原則設置しないことが望ましい。ただし，受験生への付き添いが必要な場合は受験生と同等の感染予防を講じることを条件に入場を認めること。	父母控室（例年，新見附校舎）は設置しない。 配慮受験の付き添いは認めるが，感染予防に努める。	入学センター，大学院課（庶務課）
12	試験開始前に発熱・咳の有無を監督者により確認	試験開始前に発熱・咳の有無を監督者により確認し，本人の申出により該当者がいた場合は，診療室で対応することを案内しつつ，追試験による対応等を提示すること。ただし，追試験などが難しいなど特別な事情がある場合には別室での受験を提示することができる。	発熱・咳等の有無を監督者が確認する（監督要領にセリフを記載）。【本日の試験では，発熱や咳などの症状のある人は，診療所で症状を確認してもらうことになります。】【発熱や咳などの症状のある人は，手を高く挙げてください。】 該当者がいた場合は，該当者→診療所で検温→37.5度以上受験不可	入学センター，各進行本部，保健課
13	無症状の濃厚接触者への対応	無症状の濃厚接触者・帰国後２週間の者（以下の要件を満たす者に限る）に，各大学の実情により受験を認めることができる。 i)初期スクリーニングの結果，陰性であること。 ii)受験当日も無症状であること。 iii)公共の交通機関を利用せず，かつ，人が密集する場所を避けて試験場に行くこと。 iv)終日，別室で受験すること。	該当する受験生は試験前日10時までに入学センターに連絡。 東京会場は市ヶ谷（富士見）で吸収，地域会場はそれぞれで受け入れ。 ※地域会場のルールにより受け入れ不可の場合あり。 i)他の受験生と別動線確保，ii)座席の間隔を2m以上確保，iii)受験生と監督者との間隔を2m以上確保，iv)受験生，監督者ともマスク着用，手指消毒。 市ヶ谷キャンパスは車両をBT地下駐車場に入構させ，BT7階教室へ誘導。	入学センター，各進行本部等
14	換気の実施	一律に換気の目安を示すことは難しいものの，少なくとも1時限終了ごとに，できるだけすべての窓を可能な限り長く，少なくとも10分程度以上換気することが望ましい。	各時限終了時に監督者が窓を開け，次の時限開始時に監督者が閉めることを監督要領に記載する。 休憩時間中は補助員等が巡回し点検する。 窓がない教室は廊下側の扉を上記のとおり対応する。 試験中の廊下側の扉の開閉については，各会場の実情に応じて各会場の進行本部が判断する。	各進行本部，学生センター
15	昼食時の対応	受験生には昼食持参と自席での食事を要請する。	入試要項に記載している。 監督要領に自席で食事をとること（セリフ）を記載。【休憩時間中は，静かにしていてください。なお，昼食をとる際は，自分の席で食べるようにしてください。】	入学センター，学務部
16	非接触体温計などによる検温	熱の高低での識別が難しいこと，検温実施のために密空間が生じるおそれがあることなどから，全員一律に行う必要はない。 ただし，試験場の入口に，発熱・咳等の症状のある場合はその旨を申し出ることを記載した案内紙を掲示するなど，体調不良者に注意を促すことが望ましい。	非接触体温計による全員一律の検温は実施しない。 ※地域会場のルールにより，検温を実施する場合がある。 検問等に発熱・咳等の症状のある場合は申し出る旨の掲示を行う。申し出があった場合の対応はNo.12のとおりとする。	庶務課，小金井事務部，各進行本部等

［図表３］ガイドラインへの本学の対応一覧

パスや付属校*1の校舎、学外では近隣の大学や民間のホール、会議室等の借用を検討した。学内施設は、貸借費用は発生しないが、候補とされたキャンパスは受験生の輸送の問題や降雪の影響などが懸念された*2。また、付属校の校舎については、2月5日に第二高等学校を使用しているが、さらに日程や会場を増やす場合、中学・高校の授業やイベント等を中断しなければならず、大学の都合だけで使用を増やすことは難しかった。近隣の大学については、例年、志願者が増加して会場が不足した場合に対応できるようにするため、ご協力をいただいていたが、コロナの先行きが不透明だったため、例年お借りしている施設の借用が難しくなった。民間のホールや会議室は例年も借用しているが、費用が高額なため、容易に増やせなかった。そこで、横浜駅周辺や千葉県内の民間施設も確保しつつ、近隣の複数の大学に相談させていただいた結果、2月5日について、中央大学様が後楽園キャンパスで約1千名収容可能な建物をお貸しいただけることになった。また、第二高等学校は2月7日が日曜日で授業がなかったことから、2月5日に加えて使用できることになった。最終的に横浜駅周辺や千葉県内の施設の借用は見送ったが、これまで借用していた民間施設の居室を例年より多く確保することで対応することにした。

5 人員の確保

会場確保と並んで、人員の確保も大きな課題の一つだった。会場や試験室が増加すれば、その分、監督者や誘導員の増員が必要となる。また、監督者が新型コロナウイルスに感染したり、あるいは、濃厚接触者となったり、例年なら多少の体調不良でも本人の判断で入試業務に従事していたケースでも、今回は万が一に備え無理ができないこともあり、当日の欠勤者が例年より増えることも想定する必要があった。そこで、以下の対策をとることにした。

(1)教職員の監督担当回数を増やす

まずは、教職員の監督担当回数をどの程度増やせるか考えた。しかし、入試の時期は同時に教職員にとっても繁忙期であり、限界があった。結局、教員については1人あたり0.5回、専任職員は1回、それぞれ増やすのが限度だと判断した。非専任職員についても例年以上に協力をお願いすることにしたが、専任職員同様、回数を増やすこと

は難しかった。

(2)校舎1棟の監督業務と誘導業務を外部委託する

本学では、学内の施設では教職員等が監督を担当するが、地域会場では外部委託によって運営している。今回は教職員の監督担当回数を増やすには前述のとおり限界があったため、学内の施設のうち1棟分を地域会場のように外部委託により運営できないか検討した。幸い、2月5日の中央大学会場の委託業務に従事いただいた要員の多くが引き続き本学の入試業務に従事可能となったため、2月7日から最終日までの7日程について、学内施設1棟分を外部委託することとした。これにより、約４００回分の監督回数を外部委託することができた。実施にあたっては、労働法規に違反しないように留意した。

一方、監督者以外の要員として、前述のとおり本学では主に体育会の部に所属する学生を雇用しているが、学生への感染防止を考慮すると、頭の痛い問題だった。これまでは各部に必要人数を割り振り、選出してもらっていたが、今回は、これまで以上に丁寧に説明の上、本人に入試業務に従事したいという希望があることと家族の同意が得られていることを確認した上で選出してもらうことにした。その結果、選出人数は例年の7割に留まったが、案内看板の増設、人感スピーカーの設置、校舎1棟の外部委託等により、減少分を補うことができた。

6 感染防止対策

ガイドラインで求められた感染防止対策はひと通り実施した。試験室ごとに設置することとされた消毒液は、入手困難が予想されたことから、すぐに大学の子会社を通じて調達した。換気(窓の開閉)については、試験監督者が各時限終了後の退室時に開け、次の時限の入室時に閉めることとし、監督要領に記載することでもれなく実施できるようにした。市ヶ谷キャンパスには毎回5千名以上の受験生がいるため、受験生入口の混雑回避のため開門を30分早め、退場時は試験室ごとに間隔を空けて退室させた。前年の入試までの6年間、キャンパス再開発で動線が複雑なところは、時差退構を実施していたため、そのノウハウを生かすことができた。

試験監督者の控室も例年かなりの過密状態だったため、対策が必要だった。相応しい部屋が豊富にあるわけで

Exams V

はなかったが、可能な範囲でより大きい部屋に変更、または、複数の部屋に分散することにした。分散した場合の情報共有が課題だったが、オンライン会議ツールを全国の会場に接続することでリアルタイムでの情報共有が可能となった。監督者の出勤時の受付や各時限終了時の答案回収の過密状態も回避する必要があったが、前者は役割による時差出勤*3とカードリーダーによる受付*4、後者は答案の受領と内容確認を同時に実施する方法を改める*5ことで、できるだけ密を回避した［写真1］。

［写真1］ファイルボックスが並べられた試験進行本部

7 体調不良者の対応と特別措置

入試では毎年のように、受験生の体調不良者が発生する。受験生はたった1日でこれまでの努力が試されるので、多少具合が悪くても、無理を押して試験場に来ることがある。例年、体調不良で棄権する受験生は数十名おり、中には一人で帰途に就くのが難しいほど衰弱している者もいる。コロナ禍においては、当然、感染防止に気を遣いながらの対応となる。

試験当日の発熱・咳等の症状のある者への対応については、大学入学共通テストの監督者要領に記載の台詞や「健康状態チェックリスト」を参考に、本学の一般入試の実情に合わせてアレンジして実施した［図表4］。また、全国の会場で対応に誤差が出ないようにするため、対応フローも用意した［図表5］。対応フローの検討にあたっては、受験生とトラブルにならないようにするため、校医

2021年度　法政大学　一般入試　健康状態チェックリスト

2021年　月　日　時　分記入

試験日	
試験会場	
試験教室	
受験番号	
氏名	

●受験生本人が記入しても構いませんが、必ず医師又は看護師が確認してください。
●記入後は，本紙を受験生本人にお渡しください。

検温結果
．　　度

⇩

・検温の結果、37.5度以上の発熱がある場合は、当該受験者だけではなく他の受験者や試験監督者等の安全確保のため、本日の試験を受けることはできません（入学試験要項P.51）。特別措置の申請をすることになります。
・37.5度未満の場合で、受験者が希望する場合は、本日の試験を引き続き受けることができます。

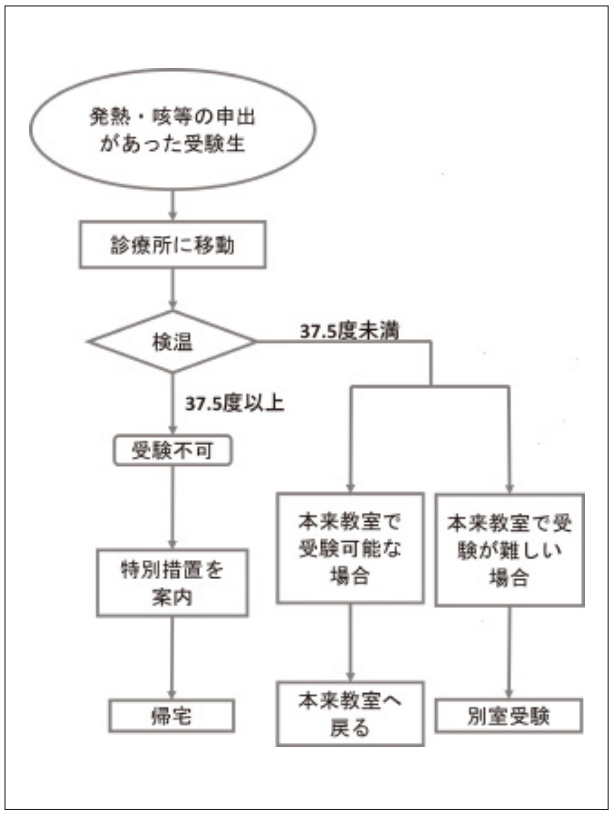
診療所確認者名（自署）：

注）本紙は、特別措置の受験申請をする場合に必要な資料として取り扱います。

［図表4］健康状態チェックリスト
※本書類は入試資料を元に一部再編集をしています。

の助言ももらいながら学内診療所の看護師や試験進行本部を担当する学務部とかなりの時間を費やして議論した。

本学では、大規模災害等で入試の実施が困難になった場合の対応として、公開はしていないものの予備日を設定し、あらかじめ予備問題も準備している。しかし、これはあくまで災害等により多くの受験困難な者が発生した場合の対応を想定しているため、新型コロナウイルス感染症を理由とした追試日の設定は難しかった。そこで、本稿冒頭でご紹介した、大学入学共通テスト利用入試（④及び⑤）への振替を、特別措置として用意することにした。万が一、新型コロナウイルス感染症に罹患等して試験を欠席した場合や試験当日に37・5度以上の発熱により受験不可となった場合に、大学入学共通テストを受験している者については、検定料を徴収せずに大学入学共通テスト利用入試への振替を可能とするものである。ただし、すでに同入試に出願済みの場合や必要な科目を受験していない場合は、検定料を全額返還することとした。



［図表５］受験生の健康確認に関する対応フロー
※本書類は入試資料を元に一部再編集をしています。

8 前哨戦としての共通テストと本番

1月16日・17日に実施された大学入学共通テストでは、本学でも約2千名の受験生を受け入れた。コロナ禍において初めて大人数の受験生を受け入れる試験とあって、ただならぬ緊張感の中で行われた。監督を担当する教員にあっても、コロナ禍においての初めての監督業務とあり、心配事について多くの問合せが寄せられた。自身や家族に基礎疾患がある、高齢者と同居している、新型コロナ感染時の労災の扱い等、一つ一つに丁寧に答えた。また、受験生についても、出願後の配慮申請やマスクができない受験生への

対応等、例年以上に気を遣った。試験当日も発熱についての質問や咳が出る受験生に対する苦情対応等、例年にはない対応が発生した。実際に新型コロナに感染したために当日欠席し、追試を申請した受験生が4名いたが、受験生の感染者はほとんどいないだろうという、共通テスト以前の自身の認識を改めるきっかけになった。語弊があるかもしれないが、その後の数万人の受験生への対応を前に、この2日間はいいリハーサル、訓練となったことは間違いない。この2日間で得たノウハウや洗い出された課題を学内で共有し、一般入試に備えた。

2月5日より一般入試は始まったが、概ね順調に推移した。しかし、新型コロナ特有の問題や問い合わせへの対応もあった。中でも非常に悩ましかったのは、入試直前に受験生と同居する家族が感染し、受験生本人は無症状だがPCR検査の結果はまだ出ておらず、保健所からはまだ濃厚接触者と断定されていないケースへの対応だった。濃厚接触者でなければ受験可能なケースだが、厚生労働省が定める定義に照らし合わせれば濃厚接触者に該当する可能性は極めて高いと判断、この時点で陰性であることが確認できていなかったため、受験を控えていただくことに納得いただいた。この他、数日前まで発熱していたが受験してよいか、先日受験したが試験室が密だったので次の受験日までに改善してほしい、試験監督がフェイスシールドや手袋を着用していないが問題ないのか、といった問い合わせや苦情が寄せられた。また、試験当日に体調不良のため学内診療所で検温の結果、37・5度以上の発熱が認められ、受験不可となったケースが1件あった。なお、新型コロナ感染症罹患等による特別措置の申請は15件[*6]となった。

終わりに

新型コロナウイルスの潜伏期間が14日間であることから、入試終了後もしばらくは気が抜けなかったが、最終日の2月16日から14日が経過しても、受験生あるいは教職員、委託業者等から、新型コロナウイルスに感染したという報告はなかった。どうやら、本学の入学試験に起因した新型コロナウイルスの感染は、なかったと考えてよさそうである。

本学は2016年に法政大学憲章「自由を生き抜く実

Exams VS C

践知」を制定した。「実践知」とは、課題解決のためにそれぞれが現場で発揮する知恵と知性のことである。大規模な入試の実施はあり得ないと考えられていたところから、一人の感染者も出さずに入試を終えるまで、各教職員が各現場で知恵・知性を発揮し結果に結びつけたことで、私たちは思わぬ形で「実践知」を体現することになった。秋からは留学生入試を皮切りに、総合型、学校推薦型選抜等が行われるが、これからも憲章の理念を胸に刻み、課題解決に努めたい。

＊1 中学高等学校（東京都三鷹市）、第二中・高等学校（神奈川県川崎市）、国際高等学校（神奈川県横浜市）

＊2 2014年度入試まで多摩キャンパス（東京都町田市）も使用していたが、大雪により最寄駅からのバスが運行できなくなるなど大混乱が生じたため、翌年度より入試での使用を取りやめている。

＊3 集合時刻間際に受付が混雑することから、主任監督者（チーフ）とその他の教職員の監督者、学生の監督者で少しずつ集合時刻を変えることで密を回避した。

＊4 受付にカードリーダーを複数台設置し、教職員証や学生証を通してもらうことで出勤を確認した。

＊5 試験室分のファイルボックスを用意し、試験監督者には答案を該当のファイルボックスに入れてもらう。その後、進行本部要員がファイルボックスから答案を受け取り、内容を確認する。問題があれば、主任監督者と個別に対応する。

＊6 15件のうち、大学入学共通テスト利用B・C方式への振替が5件、振替不可・検定料全額返金対応が10件となった。

コロナ禍における入学試験の実施について

森脇 裕美子
松山大学入学広報部次長

はじめに

昨年来、世界を席巻している新型コロナウイルスは私たちの社会生活を大きく変えた。大人数を一つの教室に集める講義形式や、双方向のディスカッションを重視するゼミナール、何よりキャンパス内外での人的コミュニケーションを生む〝場〟としての機能を提供してきた大学の在り方にも、大きな揺さぶりをかけた。

四国は愛媛県松山市にある松山大学。2年後の2023年には創立100周年を迎え、現在5学部6学科、大学院、短期大学を擁する地方中規模大学で、学生数は約6000名、その約7割を地元愛媛県出身が占める。

昨年3月以降、政府より緊急事態宣言が発出されてからは、本学の学事もことごとく新型コロナに翻弄された。卒業式等の式典は中止となり、前期授業は5月下旬まで開始が遅れ、授業はオンライン中心となった。正課のみならず留学や課外活動も中止となり、就職活動にも深刻な影響を与えた。大学進学予定者との接触にも大きな制限がかかり、進学相談会、模擬授業、オープンキャンパス等は対面実施を断念し、オンライン対応を余儀なくされた。秋以降に本格化した入学試験に関しても、実施の形態や時期が直前まで見通せない状況となった。

以下では、本学におけるコロナ禍の入学試験実施について報告する。なお、本学で実施している入学試験は、①総合型選抜・学校推薦型選抜、②大学入学共通テスト、③一般選抜、の3つに大別され、この順に紹介をする。

1 総合型選抜・学校推薦型選抜

(1) オンライン実施の可能性についての事前周知

本学の総合型選抜・学校推薦型選抜は例年11月下旬に

S COVID-19

行われ、主に小論文および面接試験を課している。当該選抜の志願者の8割を四国エリアが占め、多くが近隣区域といえる。夏ごろより愛媛県内外における感染拡大の状況を注視し、試験開催2カ月前の10月1日時点で次のような周知および協力要請を各高等学校に行った。

従来通り対面での試験を実施予定であるが、感染拡大の状況によってはオンライン実施とすることも検討しており、その際には受験者の所属する高等学校を試験場として提供いただき、パソコン設置やインターネット接続の協力をお願いしたいということ（協力が不可であっても個別に受験者と連絡を取って不利益にならないよう対応を検討すること）

新型コロナウイルス感染症に関連して当日の受験ができない者に対しては別日に追試験の機会を設けること

なお、この協力要請に先立ち入学広報課職員が愛媛県内の各高校を訪問して、オンライン実施に関する学校現場の状況をヒアリングしており、本学が提示する予定としていたプランについて概ね問題ないという感触を得ていた。本学は地元からの出願者が多数を占める地方大学であり、関係者にとって唐突な依頼と受け止められないように、日頃から県内高校とのコミュニケーションを欠かさないよう心掛けている。

このような周知と並行して、各学部教授会ではオンライン実施となった場合の面接および筆記試験の方法について議論を重ねた。その後、幸いにして愛媛県および近隣県での感染状況は小康状態を保ち、実施を1カ月前に控えた11月1日には、対面実施が可能となった旨を改めて高校および受験者に案内することができた。

(2) 対面実施の対策

試験当日は文部科学省から通知されたガイドラインに沿った対応をとり、受験者以外の構内立ち入り禁止、試験室出入口での手指消毒、受験者のマスク着用指示、試験室の収容人数制限、机、椅子の消毒、受験者への昼食持参と自席での食事の要請、教職員のマスクおよびフェイスシールド着用を行った。

加えて、面接実施に際しては本学独自の工夫を凝らした。2日間で1000名近い受験者の個人面接を遂行す

Exams V

るにあたり、各受験者の集合を時間・場所の両面で分散させ、そこから控室、面接室へと移動する都度、座席消毒を徹底し、教職員スタッフによる誘導の経路とタイミングにも気を配った。これらすべてを分刻みのタイムテーブルによって管理することとしたが、各受験者の面接時間が長短ばらつくと前の工程が詰まり密集が生じてしまう。そこで、個人ごとの面接時間も同様に分刻みでコントロールした。新型コロナ対策として面接室の出入口ドアを開放した状態で面接試験を行ったため、出入口の外でスタッフがストップウォッチで時間を計りながら「面接開始」、「終了1分前」といったプレートを示して室内の面接官に合図した（受験者は出入口に背を向けて着席させるため、このスタッフ合図は見えない）。各部屋で同時刻に面接を開始、終了することで、ドアを開けた状態でも他の受験者に試験室内の応答内容が漏れることを防止した。このような運用を着実に遂行すべく、事前のスケジューリングと動線確認を繰り返して精度を向上させ、試験直前にはシミュレーション動画を作成して教職員スタッフへの説明を行い、運営者全員の理解度と意識レベルを合わせるように努めた。

面接

入室前の消毒

2 大学入学共通テスト

(1) 受験者の受入れ状況

冒頭で紹介した通り本学は愛媛県松山市に所在している。本学キャンパスは国立の愛媛大学と隣接していて、授業科目、共同研究、連携協定、学生交流など、両大学は国私立の垣根を超えて協力関係にあり、日頃から情報交換も行っている。こと入試に関しては、大学入学共通テストの試験場として、この2大学のキャンパスで愛媛県の受験者（約5600人）のすべてを受け入れている。本学は地方中規模私立大学でありながら、一大学で県内全体のおよそ3割もの受験者を受け入れており、負荷が相当に大きい。令和3年度大学入学共通テストにおいては両大学で協議を行い、新型コロナの影響により増加すると思われる追試験実施を愛媛大学が一元的に引き受け、その代替として本学が本試験で例年より多めに受験者を引き受けることとし、両者で役割分担を行った。

(2) 受験者向けの感染対策

先に実施した総合型選抜、学校推薦型選抜と同様に、文部科学省のガイドラインに沿った感染対策を行ったが、先の入試よりも受験者数が非常に多いことから、受験者が密集状態

終了後消毒

スタッフ合図

COVID-19

にならないよう動線確保には特に気を使った。教職員スタッフが行う受験票のチェック箇所を、間口が狭い試験室出入口から広いスペースが取れる建物出入口に変更したり、トイレ出入口付近では床に足跡マークを貼付したり、試験室がない建物のトイレも利用できるように案内掲示をしたりと、可能な限りの分散対策を行った。その他にも、各試験室の収容人数を減じて使用教室数を増やし、試験室出入口には例年より多くの教職員スタッフを配置して受験者の手指消毒を行った。

もっとも、試験当日になってから明確になったこともある。当然のことであるが試験室内では受験者は私語を慎み、互いに十分な距離を保ち、安全な状態が確保できている。しかし、休憩時間に試験室外において友人同士が集まり、至近距離で会話が盛り上がっている光景が散見された。事前にも注意喚起は行っていたが、試験の緊張から一時的に解放された受験者の気分が高揚してしまうのも無理はない。教職員スタッフによる休憩時間中の巡回を重点的に行って、受験者への呼びかけを強化した。

(3) 教職員スタッフの対応

試験実施本部では試験監督者の3密回避に努めた。実施本部での問題用紙や解答用紙等の受け渡しに際しては、集合場所や休憩場所の分散、密集しないための動線設定、実施本部への入室者数を主任監督者など各試験室のうち数名に限定する、試験当日のスタッフ集合時に行っていた事務連絡を予めメールで伝えておく等、多くの対策を実施した。ただし、試験監督者をはじめ教職員スタッフの一斉集合を控えること、あるいは集合を短時間とすることは感染防止には有効であるが、そのために業務説明がおろそかになり、試験の機密性保持やマニュアルに基づく公正公平な試験実施に支障をきたすようなことはあってはならない。教職員スタッフへの事前説明に際しては、簡略化と周知徹底のバランスを取ることを心掛けた。

すでに触れたように、本学はその規模に比して大学入学共通テストの受験者受入数が非常に多い。例年、専任教職員の全員を土曜あるいは日曜の試験業務に割り当てる全学体制で臨んでいるが、使用教室の増加、試験監督者の分散割り当て、連絡員スタッフの増員により、教職員全員が2日間とも出勤する体制となり、運営側の負荷は増大した。

3　一般選抜

大学入学共通テストの終了後も新型コロナの状況は大き

Exams VS C

くは動かず、2月初旬の本学一般選抜についても、感染対策に留意をしつつ例年通り対面式での実施となった。対応内容は、ほぼ大学入学共通テストと同様である。一般選抜に特有の事項として、学外試験場の設置がある。本学では中四国エリアを中心に東京、大阪、九州、沖縄を含め全部で15の学外試験場を設けて、教職員が出張して試験監督業務を行う。感染拡大が懸念される地域への出張には細心の注意を払い、現地ではタクシーで移動する、到着後はなるべく宿泊ホテル内で待機する等、人が集まる場所を避けるように努め、本学に帰着後も一定期間の勤務配慮や経過確認を行い、教職員の安全確保に努めた。

なお、新型コロナに関連して当日に受験ができなかった出願者のために、今年度は総合型選抜、学校推薦型選抜、一般選抜において追試験日を設定した。結果的に申請があったのは若干名であり、特に大きなトラブルはなく追試験を実施できた。

おわりに　今後の課題

今もって新型コロナの終息が見えてこない中、受験者および教職員の安心、安全確保を最優先に考えながらも、公正公平な入学試験を実施する方策を検討していかなければならない。とはいえ、本文中で触れたように本学はすでに専任教職員すべてを動員した全学体制で入試業務に当たっており、これ以上の人的リソースの供給には限界がある。

感染拡大状況を踏まえ、総合型選抜、学校推薦型選抜のオンライン実施について検討をした際には、時間的な猶予がないこと、予算上の制約もあったことから、急場をしのぐ対応としてパソコン、スピーカーなどの機器を確保するのがせいぜいで、通信ソフトウェアはZoomなど無料のツールを利用する他なかった。これで1000名近い受験者の面接試験を行うには、事前設定や当日の運用に膨大な労力を要することは明らかである。オンライン試験実施用に設計された有償のパッケージソフトの導入について検討が望まれる。

一方で、新型コロナの対応を迫られたことで、効率的な連絡方法や動線の工夫など、得られた知見やノウハウも少なくない。今回の経験を生かしながら、不測の事態にも対応できる体制づくりが今後の課題ともいえる。

コロナ禍での大学入試準備、実施を振り返る

飯山 晴信
学校法人武蔵野大学
経営企画部長

はじめに

武蔵野大学は現在、東京都に2つのキャンパスを有し、12学部20学科、13大学院研究科、通信教育部などをあわせて学生数1万2000人超の総合大学である。2021年4月にはアントレプレナーシップ学部を設置し、2024年の創立100周年とその先の2050年の未来に向けて、クリエイティブな人材を育成するため大学改革を進めている。

大学入試においても変革期となるといわれていた2020年。新型コロナウイルス感染症により、予期せぬ形で入試形態の変革が進んだ。これはどの大学でも同じ状況であろう。特に先進的な取り組みではないが、コロナ禍での本学通学制の入試実施やそれに至る準備について紹介することで、他大学の同業務に従事する方々にとって得るものがあれば幸いである。

1　コロナ流行 ～2020年度入試を振り返って～

2019年12月、中国で発見されてからそれは瞬く間に世界中に拡大し、2020年1月15日に日本で初の感染者が確認されてからは日を追うごとに国内でも事例が増えていった。そのような中で本学は筆記試験となる一般選抜A、B、C日程を行っている。まず、2月5日、6日の一般入試A日程（現：一般選抜A日程）では、試験監督となる教員に対してマスクの着用を指示し、大学にて配付用のマスクを用意した。2月下旬にはさらなる感染拡大防止対策が必要と判断し、3月3日の一般入試C日程では受験生の座席の配置を前後1列空けるよう変更し、休み時間の換気を実施した。

2 感染拡大から緊急事態宣言 ～オンライン面接の導入から実施～

コロナはその威力を増し、本学では2020年度は4月から対面授業の中止が決定し、学年暦通りにオンライン授業を実施した。同時期の対面での広報イベントも軒並み中止とし、毎年6月に開催しているオープンキャンパスはオンラインでの実施となった(Webオープンキャンパス)。オンライン授業が開始されていたものの、オンラインで学科説明や個別相談を行うことにまだ抵抗を感じる、あるいは操作に不慣れな教員が複数いる時期であった。

コロナの収束が見込めない中でも出願開始までの時間は刻一刻と過ぎていき、6月からは秋以降の推薦入試実施におけるオンライン面接のシステム検証を本格的に開始し、「WEB面接サービス harutaka」の導入を決定した。8月までのWebオープンキャンパスを終え、教職員やオープンキャンパスの参加者は、オンラインでの説明や相談に徐々に慣れていった印象があった。

面接入試をオンラインで実施することについては、感染状況等を踏まえ入試時期に応じて2回に分けて発表した。受験生には出願開始直前の変更となった入試もあったが、実施自体に大きな混乱は見られなかった。当日の入試出席率は、10月に実施した総合型選抜Ⅰ期は前年同時期のAO入試の出席率96.8%を上回る97.4%であった。11月実施の公募制学校推薦型選抜Ⅰ期は前年96.3%に対し、98.2%となった。実は、Webオープンキャンパスの個別相談では予約者の当日無断欠席が多くいたことから、面接入試当日も欠席者が増えるのではないかという懸念があったが、良い方向に裏切られた。受験生には事前の接続テストを必須とし、さらに当日の接続状況や機器トラブル等により予定通り面接が行えなかった受験生に対しては、電話で状況を確認し同日中に面接の再設定を行い、公平な実施となるよう努めた。

3 ウィズコロナ～試験場での筆記試験実施～

対面授業の中止と合わせ、4月からは本学職員も自宅でのテレワークが半数以上となり、1月以降の筆記試験入試が通常体制では実施できないことを前提に準備を始めた。現実のものとはならなかったが、筆記試験が一切実

施できない場合のシミュレーションも行っていた。

6月末には、筆記試験時の試験室収容人数を減じる検討を開始。一部の入試では体育館を試験室とするために机・椅子を配置しても本学キャンパスだけでは試験室が足りない見込みとなり、8月に有明キャンパス付近の学外の会場を追加で確保した。並行して実施の詳細は文部科学省のガイドラインに則った対応を検討した。

試験室入口

武蔵野大学の入試における感染症対策動画

受験生の入場方法については、武蔵野キャンパスがほぼバスでの来校となるため、受験番号ごとに入場時間を割り振ったり、厳密に一定間隔を空けて入場させたりという対応は実施しなかった。誘導での声掛けと、試験場の入口への消毒液設置をした。さらに、試験室に入る際にも手指の消毒をしてもらうため、試験室は入口と出口を固定し、入口に消毒液を設置した。これにより受験生の動線を固定し、出入口での混雑を避けられた。なお、呼び掛けなくてもほぼ全員が消毒しており、既に一般の店舗などで入口に消毒液があり、入る際に消毒するという行動パターンが定着していたためと思われる。

その他、次の対応を実施した。

- 試験場および試験室の設営後には机・椅子・ドアノブ等にアルコールスプレーを塗布しての消毒、試験後にも同様に消毒。
- 試験監督者、入試実施関係者、受験生にマスクの着用を促し、忘れた場合は大学から配付。

- 体調不良者用の別室は席の間隔を例年より広げ2mとし、また部屋数も多く設定。
- 試験と試験の間の休憩時間には、試験室のドアは開放し、機械換気の弱い武蔵野キャンパスについては窓も開放。

なお、これらの本学の入試における感染症対策については、動画を作成のうえ、大学ホームページで紹介し、安心して受験できるよう工夫した。

おわりに

これらの入試実施における対策を講ずるには、充分な教員の理解が必要である。本学は全学部で入試制度や日程を比較的揃えており、これまでも全学体制で臨んできた。昨年度については、非常事態であり、あらゆる実施体制の変更を共有することから、入試担当副学長のもと各学科の入試実務委員を集めた説明会を2回行った。

本学にとって残念だったのは、例年であれば入試広報および入試実施に在学生の協力があったが、対面する場面においては全て在学生の参加が叶わなかったことだ。これは現時点でも続いており、在学生のパワーが受験生に届かないことが非常にもどかしい。

10月以降、オンライン面接実施や筆記試験実施体制についてマスコミ各社の取材が相次ぎ、大学入学共通テスト前にはテレビだけで3社の放映があった。社会の関心が高い事項であり、大学業界全体の取り組みとして入試実施にむけて丁寧に準備している様子を理解いただけたと思う。

2022年度入試に向けて、まだまだ予断は許さない状況であるが、知見を重ね受験生が安心・安全に受験できるような準備、実施を進めたい。

オンラインを活用した入試の実施と可能性

―総合型選抜、学校推薦型選抜での活用事例を通して―

井上 隆信
大正大学入試部部長

1 初めてのオンライン入試の導入について

大正大学では、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、初めてのオンライン入試の導入を2020年7月に決定し、ホームページで公表した。これは、「総合型選抜や学校推薦型選抜でオンライン面接など工夫を凝らした選考方法を取り入れるよう」、文部科学省が全国の大学に対して要請したことを受けての決断であった。

2 実施したオンライン入試の種類や内容について

- 総合型選抜（第二次審査）
- 宗門子弟特別入試
- 学校推薦型選抜（公募制／探究活動・課外活動型／指定校）

以上の3種類の入学試験で導入した。

告知は、ホームページと高校教員向けに制作したリーフレット［図1］を配布して行った。

導入にあたっての主なポイントは、次の通りである。

①受験生の選択により、「対面」か「オンライン」で出願可とする。

②「対面」と「オンライン」で募集定員を分けて実施する。（宗門子弟特別入試は除く）

①については、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、基本的に一都三県以外の受験生が「オンライン」を選択できるとしたが、コロナ禍により「対面」での受験に不安がある場合は一都三県の受験生でも可とした。②については、選考方法を「対面」と「オンライン」で全く同じにすることはできないため、募集定員を分けて実施することとした。

Exams VS C

総合型選抜は、第一次審査と第二次審査の2段階で合否判定を行う。第一次審査は、高等学校調査書・セルフポートレート・志望理由書・大学での学びの計画書・共通課題・学科コース別課題を受験生が郵送し、それらの書類審査により第一次合格者を選抜する。第二次審査は「対面」で行い、第一次審査との合計点で合否を判定するのが従来の方法である。

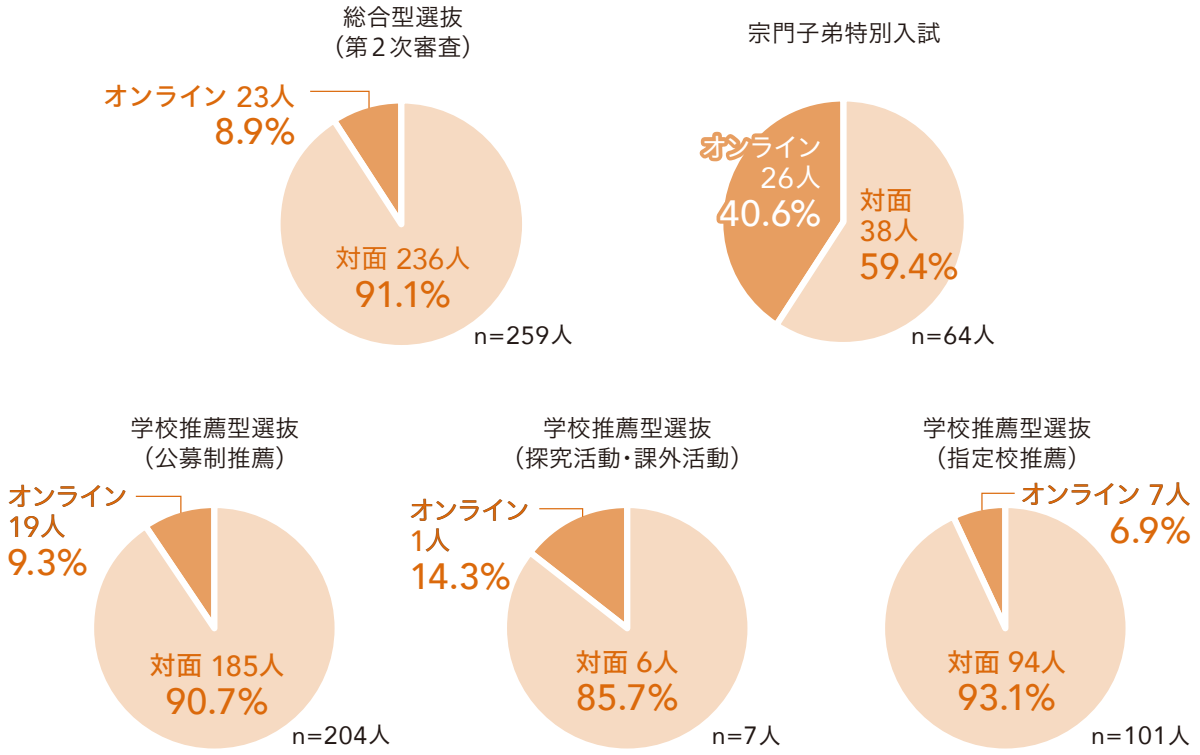
今回、総合型選抜の第二次審査は、「対面」では「模擬講義＋レポート」や「プレゼンテーション」、「グループディスカッション」など学科によって多様な選抜方法で200点満点であるのに対して、「オンライン」ではグループでの「プレゼンテーション＋面接」（配点100点）という統一した内容で行うこととした。［図1］

これにより、第一次審査の200点との合計が「対面」で400点、「オンライン」で300点となるため、合格基準点も別に判定することとした。

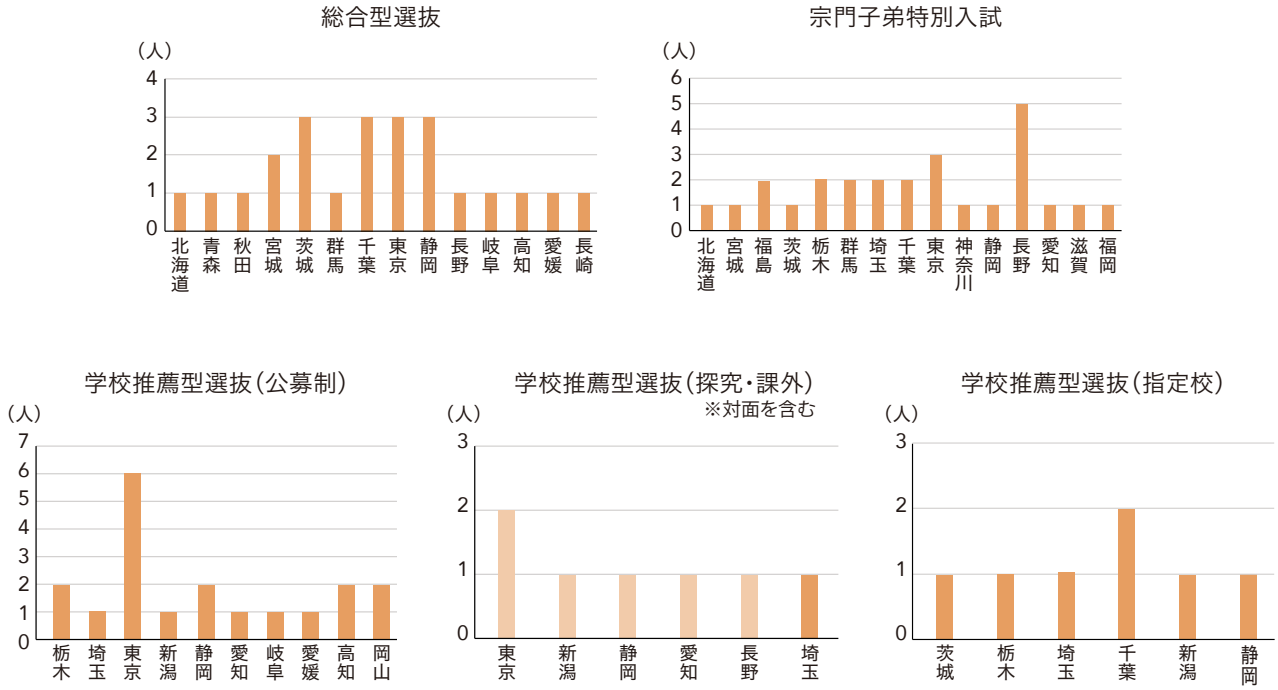
宗門子弟特別入試では、「対面」で「小論文」「基礎確認テスト」「面接」（配点は各100点）の300点満点のところ、「オンライン」では、「事前課題」3題（配点150点）とZoomによる「個別面接」（配点100点）にプラス

［図1］高校教員向けオンライン入試告知リーフレット

試験種類別「対面」「オンライン」志願状況



試験種類別「オンライン」志願者の出身地状況



［図2］試験種類別の「対面」「オンライン」志願状況、出身地状況

して、「事前課題に関するプレゼンテーション」（配点50点）を課し、300点満点とした。この入試では、「オンライン」の導入決定が直前になったことと募集定員が少ないことから、定員を分けて募集することはしなかった。ただし、合否判定は「対面」「オンライン」それぞれで行った。

学校推薦型選抜の「公募制」と「探究活動・課外活動型」では、「対面」の「小論文」「基礎確認テスト」「面接」の代わりに、「オンライン」では、「共通教育の授業受講＋課題レポート」、CBT（Computer Based Testing：コンピュータ ベースド テスティング）での「基礎確認テスト」、「面接」を300点満点で実施した。

「共通教育の授業受講＋課題レポート」はTeamsを、CBTでの「基礎確認テスト」はオンライン試験監督システムを、「面接」はZoomを使用することとした。

「基礎確認テスト」は同一の問題で行い、試験時間は「対面」と「オンライン」と同時刻に行うこととした。同じ300点満点ではあるが、「小論文」を「共通教育の授業受講＋課題レポート」としたため、合否判定は「対面」と「オンライン」で別に行った。

学校推薦型選抜（指定校）の「オンライン」では、Zoomでの「面接」を行った。

なお、試験種類別の「対面」「オンライン」志願状況や出身地状況は［図2］の通りである。

3 オンライン入試の実施準備について

①大学側の準備について

- それぞれの試験で、「対面」と「オンライン」で合否判定を別に行うため、Web出願システムを改修し、受験番号も別に設定することとなった。
- 「オンライン」を選択する際に推奨されるパソコンのスペックや通信環境について、ホームページに説明文を掲載した。さらに、受験にあたっての注意文章や事前接続テストのための説明文章を作成し、受験生に郵送した。

②受験生側の準備について

- 本学が推奨するパソコンのスペックや通信環境と自宅のものが適合するか、受験生各自が確認する必要があった。
- 本学が注意文章で指定した「自宅での受験環境」を整える必要があった。［図3］
- あらかじめ試験で使用するソフトのインストールを行っ

Exams V

たうえで、事前接続テストに参加する必要があった。

③実施準備での問題点について

- 総合型選抜では、事前接続テストについて周知が徹底されていない点があった。端末の指定が徹底しておらず、カメラの無い端末で参加した受験生や、スマートフォンで参加した受験生がいた。また、受験票を印刷して準備していない受験生がおり、試験当日も多少の混乱があった。さらには、事前接続テストに参加しないまま試験当日に受験する受験生がいた。
- 出願時に「オンライン」を選択したが、事前接続テストで端末や通信環境が適合しないことが明らかになり、「対面」に変更した受験生が学校推薦型選抜(公募制)で2名いた。
- 学校推薦型選抜(公募制／探究活動・課外活動型)では、「オンライン」の場合、3科目それぞれで使用するシステムが異なり、受験生のみならず大学側の負担が大きいものとなった。

令和２年10月16日

オンライン方式受験に関する注意事項

本学入学試験（総合型選抜）のオンライン方式を受験するにあたり、以下の注意事項について必ず遵守してください。

記

・原則として自宅で受験すること。
・指定されたアプリケーションを事前に使用する端末にインストールすること。
（Ｚｏｏｍ、Ｔｅａｍｓ等）
・指定された事前接続テスト期日に、接続等のテストを行うこと。
・背景となる場所はできるだけ無背景の壁面などを選ぶこと。
・事前の接続テストと同じ環境で受験すること。（同じ部屋・端末等の環境確保）
・試験監督の指示以外では、カメラは常にオンにすること。
・受験中はバーチャル背景を使用しないこと。
・試験内容の記録（録画・録音等）は行わないこと。
・試験途中で入退室しないこと。
・試験中は、面接員が指示する以外の端末操作（Ｗｅｂ検索など）を行わないこと。
・試験中の周囲には、使用する端末のみを用意し、不正に該当するようなもの
（電子機器や教科書など）は持ち込まないこと。
・その他、不正行為（疑わしい行為を含む）に該当することを行わないこと。

以上

※受験中の様子は、円滑な試験実施及び不正行為の防止のため、録画いたします。
なお録画内容は入試業務のみに使用いたします。

◎試験当日または後日、上記に違反し不正行為に該当するような内容が判明した場合、
合格した場合であっても不合格となることがあります。

大正大学

[図3]オンライン方式受験に関する注意事項

受験生は、ソフトのインストールや事前接続テストへの参加などが負担になったと思われる。大学側は各システムの事前接続テストやその準備、試験当日のサポートチームの配置や受験生へのバックアップが大変であった。

特に、Ｔｅａｍｓは、「オンライン」の受験生一人一人の登録が全員分必要であった。

また、ＣＢＴやＺｏｏｍでは、ＩＤやパスコードを事前接

続テストと試験本番とで分けて設定することとした。

4 オンライン入試の実施について

Zoomによる「プレゼンテーション+面接」の総合型選抜の第二次審査やZoomによる「個別面接」と「事前課題に関するプレゼンテーション」の宗門子弟特別入試、Zoomによる「面接」の学校推薦型選抜(指定校)は、円滑に試験を実施することができた。試験時間前にZoomへの入室時刻を設定し、入室した受験生に対して「受験番号や氏名の確認」「受験票の確認」を「オンライン」担当のサポートスタッフ職員が行い、各学科の面接官が待機する面接室(ブレイクアウトルーム)に振り分けた。

各受験生の面接終了ごとに採点や協議の時間を設け、面接官の準備が整ってから次の受験生を入室させるといった手間がかかったが、特段の支障はなかった。それよりも、受験生の操作ミスにより定められた時刻までに入室できずに、受験生やその保護者から問い合わせの電話やメールが届き、アドミッションセンターで対応するケースが数件あった。

本来、試験開始時刻に遅れた場合、交通機関の遅れなど本人の責によらない場合を除き20分以上の遅刻で欠席としている。今回、初めての「オンライン」入試のため、指定時刻までに入室しない(できない)受験生を遅刻とするか否か、判断に悩むところであった。幸い、試験時間に20分以上遅れる受験生はいなかった。

- 学校推薦型選抜(公募制)については、事前接続テスト時にチェックしきれない事態が試験当日に発生した。

まず、1時限目のTeamsを使用した「共通教育の授業受講+課題レポート」で参加できない受験生が1名いたため、時間を繰下げて行うこととなった。

2時限目の「基礎確認テスト」では、試験監督システムがマニュアル通りに動作しない受験生が複数名いた。「オンライン」担当のサポートスタッフ職員を複数名配置していたが、現場は対応に追われた。

事前接続テストでは問題なく試験監督システムに繋げられたが、試験本番では何度試しても正常に動作しないケースが発生した。それらの受験生に対しては、携帯電話で連絡を取りながらパソコンの操作を指示することとなった。場合によっては、Zoomを繋げてパソコン画面を表

示してもらいながら状況を確認した。試験終了までの1時間で解消し、CBTによる「基礎確認テスト」の試験時間を1時間確保して（終了時刻を遅らせて）実施するケースが発生した。

いろいろ対応を尽くしたが、どうしても試験監督システムが動作しない受験生も発生した。試験監督システムの代わりに「オンライン」担当のサポートスタッフ職員2名がスマートフォンでZoomを繋げて、受験生の受験態度を確認しながら、CBTで「基礎確認テスト」を受験してもらった。結局、この受験生のパソコンで試験監督システムが動作しなかった原因は分からなかった。

5 オンライン入試実施の課題について

①今回、「対面」と「オンライン」を同じ試験日・同じ試験時間帯で行ったため、面接官を「対面」と「オンライン」で分けて配置する必要が生じたこと。（人員の配置増）

②自宅にて受験する場合、公平な環境が保たれているか大学が完全には確認できないこと。

③受験生個人のパソコンによるCBTの受験では、公平性が担保できない恐れがあること。

- 自室を試験室としたCBT受験の場合、張り紙や参考書などの持ち込みを完全にはチェックできない可能性があること。
- 携帯電話などの持ち込みを禁止しているが、通信状況が悪化した場合に大学へ連絡ができないため、認めざるを得ないケースがあること。
- 自室を試験室としたCBT受験の場合、試験時間中は家族と接触しないように受験生に指示しているが、通信状況の悪化時など受験生本人が連絡できないため家族に依頼して大学へ連絡するケースがあったこと。この場合、受験生本人ではなく、家族からの連絡のため状況把握に手間取ったり、指示の伝達に時間がかかったりした。

④面接試験での工夫が必要なこと。

- 「オンライン」では、試験実施の都合上、受験生を複数名ブレイクアウトルームに入室させて面接を行った。そのため、通常の質問では先に回答した受験生が不利で、後で回答した受験生が有利になる恐れがあるため、質問を工夫した。「対面」では一人ずつ個別面接を行えば

Exams VS C

良いところ、「オンライン」では工夫が必要であった。

以上のことをまとめると、同一の試験日程で行うことは難しいとの結論になった。

試験内容を全く同一にすることは難しいため、同一日程で実施する必要はなく、別日程で行うべきだと考える。

また、試験内容も「オンライン」の特性に合わせた独自の方式で行った方が良いのではないか。

6 オンライン入試の可能性について

大正大学では、一都三県の志願者が多く、2021年度入試では7割近い状況であった。その中で仏教学部と地域創生学部は、入学者の地方出身比率が4割を超す結果である。このように地方から志願する受験生に対しては、「オンライン」での入試は移動の時間のみならず、費用の面でも負担が少ない。

大学としては地方からの志願者確保、受験生としては時間や費用の節約の面でメリットが大きいのではないか。

したがって、地方からの受験機会を拓く目的での「オンライン」入試は実施していくべきだと思料する。

コロナ禍における入学者選抜の実施
―東北学院大学の対応―

七海 雅人
東北学院大学入試部
大学アドミッションオフィサー

はじめに

東北学院大学（以下、本学）は、6学部（文・経済・経営・法・工・教養）16学科を擁するキリスト教系の私立総合大学である。宮城県仙台市の土樋キャンパスに本部を置き、今年で創立135年を迎えた。学部学科の定員は1学年2656人を数え、1年生から4年生まで総数約1万1千人の学生が、仙台市の2キャンパス（土樋と泉）と多賀城市の1キャンパスに分かれて通学している。入学者の90％以上が東北地方出身者であり、さらにそのうちの約65％を宮城県出身者が占めている。東北地方に特化した大規模校であり、地域に根ざした人材の育成を進めてきた。東北地方・北海道地方では最大規模の私立大学といってよい。

このような現況において、本学の入学者選抜制度は、文部科学省の高大接続（入試）改革の動向に対応しながら、また18歳人口の減少予測が非常に顕著な東北地方の実情に即しながら改革を進めてきた。2021年度入学者選抜では、全選抜試験において志望理由書の改定を行い、一枚型ポートフォリオの形式による探究学習の記録を課すなど、学力の三要素をふまえた多面的・総合的な評価・判定を行う姿勢をより明確にし、各選抜試験それぞれの特性を生かした制度を整えた。

そうした中にあって、今回の新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）拡大という非常事態への遭遇である。他大学と同様に本学においても、感染に対する細心の注意を払いながら各選抜試験の実施運営に取り組んだ一年間であった。その内容を報告したい。

1　文部科学省の通知を受けて

本学では、6月19日付文部科学省通知「令和3年度大

学入学者選抜実施要項について」を受けて、入学者選抜を所管する副学長・入試部長・アドミッションオフィサー2名（アドミッションズ・オフィス課長と専門的教育職員）による定例会（毎週1回）を組織し、COVID-19への対策やマニュアル作りに着手した。まず、選抜試験全体の日程やあり方について、次の事項を検討・一覧化し、ホームページ上で公表した。

①全選抜試験において追試験を設定し、受験上の注意事項（試験前日までの注意・試験当日の注意）を整備・喚起する。

②総合型選抜A日程の願書受け付けを9月15日以降に変更し、A日程第一次選抜試験のスケジュール全体を繰り下げる。

③6月の日商簿記検定試験の中止にともない、学校推薦型選抜のうち資格取得推薦（指定校）の日程を変更し、受験機会の確保に努める。

④一般選抜問題の出題範囲について、教科書の「発展的学習」の内容を配慮し、対応が必要な設問については補足説明を加えるなど受験者の理解を促す工夫を行う。

2 総合型選抜における対策

本学の総合型選抜では、第一次選抜（30分程の個人面接、経済学科のみグループ・ディスカッションも実施）と第二次選抜（小論文と5～10分程の個人面接）の二段階選抜による総合的な評価・判定を行っている。第一次選抜においてA～C評価を得た受験者が、第二次選抜へ進むことができる（D評価は不可）。A・B二つの日程を設定し、第一次選抜はA日程（9月28日～10月16日）・B日程（11月30日～12月3日）ともに3つのキャンパスにおいて、第二次選抜はA日程（11月19日）を泉と多賀城の2キャンパスにおいて、B日程（12月19日）を土樋キャンパスにおいて実施している。

第一次選抜のCOVID-19対策については、まず受験者に対して受験上の注意事項を一斉に郵送し、周知を行った。受験者が本学へ入構する際は検温を実施し、試験会場の控室における受験者の長時間滞留と一時的な集中を避けるため、指定した集合時間を厳守させた。控室では座席の間隔を前後左右1m以上確保し、受験者が面接室へ移動した後は、使用した座席の接触部分をアル

コールで消毒した。面接室では受験者と面接員との間隔を2m以上確保し、面接が終わるたびに換気を行い、机・ドアノブなど受験者が接触した箇所をアルコールで消毒した。

このA日程第一次選抜において、多賀城キャンパスでは、面接直前に濃厚接触者であることが判明した受験者1名が、追試験へまわった。当該事例の発生は、入試部に対してCOVID-19の脅威を実感させ、あらためて基本的な対策の大切さとその徹底について理解・共有を得る機会となった。

A日程の第二次選抜については、学校推薦型選抜と同日・同会場で実施するため、泉キャンパスには例年、1000人以上の受験者が来場する。そこで午前中の小論文試験では、密集しないよう注意をしながら、検温を終えた受験者を試験室へ直接誘導し、試験開始まで座席で待機させる措置をとった。午後の面接では、多数の受験者の長時間にわたる学内滞留・感染リスクを避けるため、第一次選抜でA・B判定を受けた受験者については、第二次選抜の面接は実施せず帰宅させることとした。免除した面接の成績については、第一次選抜の評価に準じる特別対応を行った。この変更点については受験票にも明記し、受験者が間違えないように注意を促した。

第一次選抜C判定の受験者は、通常通り面接を実施した。面接室には、これまで使用していなかった教室・多目的室なども活用し、受験者の密集回避と終了時間の短縮をはかった。

なお、このA日程第二次選抜では、濃厚接触者と認定されたり、高校において感染者が出たりしたことにより、8名の受験者が追試験にまわった。B日程第二次選抜における追試験対象者はいなかった。

3　学校推薦型選抜における対策

本学の学校推薦型選抜には、①指定校推薦、②資格取得推薦（指定校、公募A・B）、③スポーツ推薦、④文化活動推薦、⑤キリスト者等推薦、⑥同一法人併設高校推薦がある。⑥と②の公募B以外は、右に記したように総合型選抜A日程第二次選抜と一緒に実施している（今回、②の指定校は12月19日へ変更した）。試験の内容は、小論文と5～10分程の個人面接である。

午前中の小論文は、総合型選抜の対策に準じて実施した。午後の面接については、やはり多数の受験者の長時間にわたる学内滞留・感染リスクを避けるため、①の受験者は面接を行わず、その分の配点を今回一新した「志望理由書」（本学アドミッション・ポリシーに基づく志望理由と学修計画、高校における探究学習の記録）により評価する措置を講じた。この変更点については受験票にも明記し、受験者が間違えないように注意を促した。

学校推薦型選抜において、濃厚接触者と認定されたり、高校において感染者が出たりしたことにより、10名の受験者が追試験へまわった。

4 大学入学共通テストにおける対策

大学入学共通テストは、同じ仙台市にある仙台赤門短期大学と共同で、土樋キャンパスにおいて実施した（第一日程の1月16・17日のみ）。今回の受け入れ受験者は900人程で、大学入試センターからの諸通知に基づいて準備を進めた。

試験室は例年よりも5つ増やし、受験者の座席間隔は1m以上に設定した。濃厚接触者であってもPCR検査が陰性かつ無症状の場合、受験を認めるという大学入試センターの方針に従い、通常受験者の動線からはずれた建物の中に、当該対象者専用の試験室を配置した（共通テスト当日に使用する受験者はいなかった）。

また、今回の特別措置として体調不良者が試験途中であっても別室で受験ができるように、公平性・公正性を期した上で本学の実施内容に合わせた体調不良者対応・移動のためのフローチャートを作成した。そのための試験室（受験者の座席間隔は2m以上に設定）も別途用意し、体調不良者が出た場合、第一次に診断を行うための休養スペースも保健室とは別に設け、保健室職員に常駐してもらった。体調不良者用の別室監督者には、医療用マスクを用意し、フェースシールド・手袋の着用徹底をお願いした。

試験室にあてた校舎については、受験者の動線を一方通行にし、休憩時間における試験室の換気の徹底を心掛けた。また、受験者に注意を促すさまざまなポスターやサイン標示を作成し、構内の要所に掲示して密集の回避とスムーズな移動ができるように工夫した。とくに退出時

には受験者が密集・混雑しないように、校舎の階数ごと・試験室ごとに時差退出を誘導した。

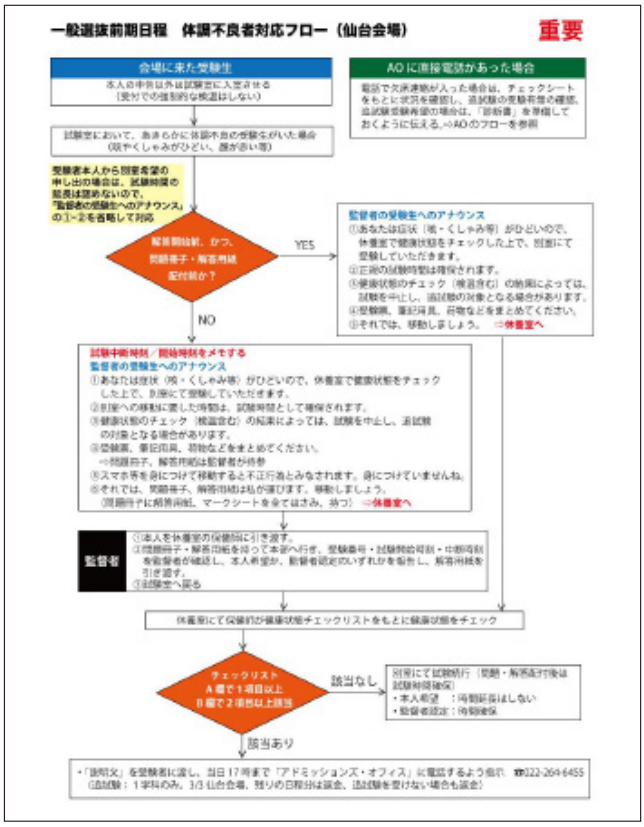
5 一般選抜における対策

本学の一般選抜は、前期日程3日間（2月1～3日）・後期日程1日（3月3日）で実施した。前期日程は、土樋キャンパス会場以外に、札幌・函館・青森・八戸・盛岡・秋田・山形・鶴岡・郡山・東京の10地区会場を設けている。

一般選抜では、大学入学共通テストにおけるCOVID-19対策を基本的に踏襲した。ただし、前期日程の地区会場については、借用した会場の規模により、濃厚接触者でPCR検査陰性かつ無症状である受験者用の特別受験室を用意できない所があったため、全会場において当該受験者は追試にまわすことを決めた（ただし、該当する受験者はいなかった）。

試験途中で体調不良者が出た場合については、9つの地区会場で専用の別室を用意できなかったものの、他の受験者と区別できる部屋へ移したり、同じ試験室の中であっても十分に離れた座席を用意したりすることによって、試験を続行できるようにした。この体調不良者への対応については、大学入学共通テストを実施する際に作成したフローチャートをベースにして、独自のチャートを作成し運用した［図表］。この前期日程において、濃厚接触者と認定されたり、高校において感染者が出たりしたことにより、3名の受験者が追試験へまわった。

なお、東京会場の試験担当者については、試験実施日が東京都の第2回緊急事態宣言期間と重なったため、仙台到着後ただちに帰宅することは止め、仙台市内のホテルに



［図表］一般選抜用体調不良者対応フローチャート

一泊してもらい、翌日PCR検査を受けて陰性であった場合は帰宅する、という対応をとった。

後期日程は、土樋キャンパスのみで実施するため、大学入学共通テストと同じ対策で臨んだ。幸いにも、追試験の対象となる受験者はいなかった(2020年度一般入試後期日程でも、COVID-19対策として急遽追試験を準備したが、対象者はいなかった)。

おわりに—実施本部における対策

COVID-19への対策・対応は、受験者に対するだけでなく、選抜試験を実施運営する側に対しても、当然求められる。監督者・面接員・受付係など受験者と至近距離で接する試験担当者は、マスク着用・手指消毒の徹底だけでなく、フェースシールドの着用も義務付けた。

各選抜試験の実施本部事務室の設置は、スタッフの密集などを避けるため、従来利用していた会議室よりも広い会議室や大教室の利用へ変更した。各キャンパスや地区会場における試験室の設定についてもシミュレーションを繰り返し、特に一般選抜の実施に関しては、感染状況の拡大と感染クラスター発生に伴う校舎の閉鎖に備えて、土樋キャンパスだけでなく、泉キャンパス・多賀城キャンパスも併用するプランを用意した。

また、入学者選抜業務は全学的に多数の教育職員・事務職員の協力を仰ぐため、業務繁忙期においては日頃の検温と健康管理を心掛けるよう促し、特に試験監督や採点・評価などの業務に携わる教育職員に対しては、試験実施2週間前からの体調チェックを厳重に依頼した。感染などにより試験監督ができなくなった場合は、入試委員の教育職員が代行する体制を敷いたが、大学入学共通テストに際しては、従来の予備監督者に加えて、各学科からさらに特別予備監督者を選出してもらい万全を期した。

以上、試行錯誤を重ね努力した一年間であった。2022年度入学者選抜においては、この経験を生かし、また他大学の事例も参考にしながら、さらなる工夫を凝らして業務に邁進したい。